



© Julia Bauer

明晰な解釈によって生かされる N響の「ドイツ本流」の伝統的サウンド

オーケストラの魅力を引き出す プログラミングの妙

パーヴォ・ヤルヴィは2015年9月のN響首席指揮者就任以来、数多くの公演で名演を重ねてきた。さらにはドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団、hr交響楽団、パリ管弦楽団などを率いての来日公演を通して、今や日本でもっとも人気のある指揮者のひとりとして不動の地位を築き上げたと言ってよいだろう。

パーヴォ^{ないじ}の他の指揮者にはない魅力は、音楽作品に対峙する際の明確な解釈姿勢にある。前述のオーケストラはおのおの全く個性の異なる演奏スタイルと特質をもっているが、パーヴォはそれぞれのオーケストラからその十全の実力と個性を引き出す最適のプログラムを選んでいくのだ。

首席指揮者に就任する半年前に行われた2015年2月定期公演でのR. シュトラウス・プログラムの圧倒的な名演はN響名演史の一頁を飾るものとなったが、それはパーヴォにとっては結果を確信していた取り組みであった。パーヴォはN響について「真に偉大なドイツの巨匠(指揮者)たちとの共演で培^{つちか}ってきたドイツ本流の演奏伝統がある」と語っている。こうして始まったN響とのR. シュトラウス録音プロジェクトは高く評価され、今回のAプロでもN響初登場であるアリョーナ・バーエフをソリストに迎えたR. シュトラウス《ヴァイオリン協奏曲》が組まれている。

今月のマエストロ

パーヴォ・ヤルヴィ

Paavo Järvi

文◎平野 昭 | Akira Hirano

パーヴォの音作りに期待がふくらむ 多彩なラインナップ

今回はAプロがドイツ音楽で、BプロとCプロがロシア音楽特集とでも呼びたいラインナップ。なかでもパーヴォがぜひとも日本の音楽ファン、とくにマーラーやブラームス、ブルックナーなど19世紀後半のドイツの交響曲ファンに聴いてもらいたいと熱く語っているAプロのハンス・ロット《交響曲第1番》は聴き逃さない。父ネーメが熱心に取り組んできたロットの交響曲をパーヴォがいかに造形するか大いに注目される。

ストラヴィンスキー作品によるBプロのメインは《春の祭典》であるが、デジタル的精緻さとエネルギッシュかつシャープな切れ味のリズムの炸裂を聴かせてくれるだろう。そして、これとはまた違った解釈が期待される小品4曲も大きな楽しみだ。曲順にもひとつの流れが窺える。幻想曲からスケルツォへ、そして「葬送」繋がりで《春の祭典》の〈いけにえの踊り〉への道筋が浮かび上がる。

ラフマニノフとプロコフィエフによるCプロでもパーヴォの音楽作りに注目したい。ラフマニノフ《ピアノ協奏曲第2番》は1901年の作品、プロコフィエフ《交響曲第6番》は第2次世界大戦終戦直後の1947年の作品である。共通の伝統をもつ2人であるが、作曲家の個性の違い、協奏曲と交響曲というジャンルの違いだけではなくそれぞれの作品がもつ時代様

式をパーヴォがいかに彫琢^{ちようたく}するかが聴きどころとなるだろう。

[ひらの あきら／音楽評論家]

プロフィール

2018年9月にNHK交響楽団首席指揮者として4シーズン目を迎えたパーヴォ・ヤルヴィは、これまで重点的に採り上げてきたドイツ・ロマン派や北欧の作品に加えて、新たに古典派やストラヴィンスキーに取り組む。その挑戦する姿勢は、発信力の強さと相まって、N響のみならず、日本のオーケストラ界全体にとって大きな刺激となっている。N響とは、録音の分野での成果も目覚ましく、2016年度には「レコード・アカデミー賞」を受賞した。また『ムソルグスキー：展覧会の絵&はげ山の一夜』『マーラー：交響曲第6番「悲劇的」』など新譜のリリースも続いている。一方、海外活動では、2017年にヨーロッパ6か国7都市を回るツアーを大成功に導き、N響の国際的な評価を高めた。

エストニアのタリン生まれ。現地で打楽器と指揮を学んだ後、アメリカのカーティス音楽院で研鑽^{けんさん}を積み、バーンスタインにも師事。シンシナティ交響楽団音楽監督、hr交響楽団首席指揮者、パリ管弦楽団音楽監督などを歴任。現在は、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団芸術監督、エストニア祝祭管弦楽団芸術監督兼創設者などを務める。2019/20年シーズンからはチューリヒ・トーンハル管弦楽団の音楽監督兼首席指揮者に就任予定。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などの名門オーケストラにも客演し、現代を代表する指揮者のひとりとして、世界で活躍している。



N響ホームページでは、パーヴォ・ヤルヴィが2月Aプロで採り上げるハンス・ロット《交響曲第1番》の魅力を語るインタビュー動画をご覧ください

PROGRAM

A

第1906回

NHKホール

2/9 土 6:00pm

2/10 日 3:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.4

ヴァイオリン | アリョーナ・バーエワ

コンサートマスター(客演) | 白井 圭◆

◆白井 圭: 1983年、トリニダード トバゴ生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て同大学を卒業。2007年からウィーン国立音楽大学に留学。ウィーン国立歌劇場管弦楽団の契約団員として在籍した他、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ケルンWDR交響楽団をはじめ、国内外のオーケストラにゲスト・コンサートマスターとして招かれている。

R. シュトラウス

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品8[30']

I アレグロ

II レント、マ・ノン・トロツポ

III ロンド: プレスト

——休憩——

ハンス・ロット

交響曲 第1番 ホ長調[56']

I アラ・プレーヴェ

II 非常に遅く

III 明朗に、生き生きと

IV 非常に遅く—活発に

Artist Profile

アリョーナ・バーエワ(ヴァイオリン)



カザフスタンのアルマトイに生まれ、モスクワ音楽院附属中央音楽学校およびモスクワ音楽院にて学び、エドゥアルド・グラチに師事。2003年にはロストロポーヴィチの推薦を受けフランスで学び、2007年からは小澤征爾スイス国際音楽アカデミーにも参加した。2001年にヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクールで優勝し、2004年にはパガニーニ・モスクワ国際コンクールでグランプリを獲得。この時にヴィエニャフスキ自身が使用したストラディヴァリウスを1年間貸与されていた。2007年には第3回仙台国際音楽コンクールで第1位および聴衆賞を受賞。これまでゲルギエフ、バシュメット、フェドセーエフといった指揮者との共演で、マリンスキー劇場管弦楽団、ロシア国立交響楽団、ベルギー国立管弦楽団などのオーケストラに定期的にソリストとして招かれている。のびやかな音色と豊かな感情表現が魅力のバーエワはレパートリーも幅広く、室内楽でもアルゲリッチなど著名なアーティストと共演している他、ブルッフやショスタ

コーヴィチ、シマノフスキの協奏曲、プーランクにプロコフィエフ、ドビュッシーのソナタなどのCDもリリースしている。今回の公演はN響との初共演となる。

[長井進之介／音楽ライター]

Program Notes | 広瀬大介

1880年代のドイツ・オーストリアで芽吹いた2つの才能。前時代の作品を学びつつ未来を見据え、形式を越えて伸びやかな着想が息づく2つの作品。リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)とハンス・ロット(1858～1884)、若き日の作品を並べて聴けば、その個性の違いははっきりと聞き分けられることだろう。パーヴォ・ヤルヴィが注ぐ眼差しの奥行きとあたたかさが、両曲を包み込む。

R.シュトラウス

ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品8

学生時代、リヒャルト・シュトラウスは、2曲の交響曲(ともに4楽章形式)に加え、《クラリネットと管弦楽のためのロマンツェ》(単一楽章)を手がけた。伝統的様式に則った3楽章形式の協奏曲に取り組んだのは、この《ヴァイオリン協奏曲》が初めてということになる。作曲を終えた1882年3月当時は、僅か17歳。ヴァイオリンの師であったバイエルン王立管弦楽団のコンサートマスター、ベンノ・ワルターに捧げられた。晩年のシュトラウスは回想録で、同年12月のピアノ伴奏版初演を次のように書き遺している。「私の初めての演奏旅行は、ワルターが演奏する(ギムナジウム7年生のときに学習ノートに作曲した)《ヴァイオリン協奏曲》の伴奏で赴いたウィーンであった。ハンスリックからは初めて、そして一度だけお褒めの言葉を授かった」。ただ、オーケストラを伴う初演は1890年まで機会を得られず、オーケストラ総譜の出版は1897年(アイブル社)までずれ込んだ。すでに実質的な協奏曲とも言うべき《ドン・キホーテ》^{ちゅうちよ}までを手がけていたシュトラウスにとって、若き日の協奏曲を出版することに多少の躊躇があったのだろうか。

第1楽章では、27小節の序奏の後、ヴァイオリン独奏が重音やオクターヴ奏法などで華麗に始まるが、その後の第1主題・第2主題は旋律楽器としての特性を活かすように作られており、超絶技巧を見せるタイプの協奏曲とは一線を画している。カデンツァは403小節あるこの楽章の中間・展開部に置かれており、メンデルスゾーン^{ひれき}の協奏曲に範を取ったか。切々と歌う第2楽章は初演直後から特に評価が高く、この楽章だけの楽譜が販売されるほどだった。第1楽章はニ短調からニ長調へと華やかに終わるが、第3楽章はニ長調の朗らかなロンド主題が全曲を華やかに彩る。ブラームスの重厚さ、メンデルスゾーン^{ひれき}の軽やかさが融合した世界を、17歳の少年は堂々と披瀝した。

作曲年代	不明～1882年3月22日
初演	[ピアノ伴奏] 1882年12月5日、ベンノ・ワルターのヴァイオリン独奏、作曲家自身のピアノ [オーケストラ伴奏] 1890年3月4日、ベンノ・ワルターのヴァイオリン独奏、フランツ・ヴェルナーの指揮、ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

ハンス・ロット

交響曲 第1番 ホ長調

権謀術数渦巻くウィーンの音楽界にあって、1874年からブルックナーにオルガンを師事したハンス・ロットは、もっとも悲劇的な犠牲者のひとりとなってしまった。1878年、ウィーン音楽院の卒業制作で《交響曲第1番》第1楽章を提出するが、審査員はその未熟さを嘲笑い、ひとりブルックナーだけが「^{あざ}嗤わな^{わら}いでください、皆さん。この人からはさらに偉大な作品を聴くことになるはず」と擁護したという。1880年までに全4楽章の作曲を終えたロットは、指揮者ハンス・リヒターに、そしてブラームスにも交響曲の評価と演奏を願い出るが、大作曲家はこれを酷評。同年、ミュールハウゼン（現フランス・ミュルーズ）の合唱指揮者となるも、移動中に「ブラームスがこの列車に爆薬を仕掛けた」と正気を失う。25年の短い生涯を終えるまで、ロットが精神の闇から抜け出すことはついになかった。過去の傑作に倣い、現在の響きを反映し、そして未来までも詰め込まれたこの交響曲を聴けば、「さらに偉大な作品」の数々が遺されなかったのは残念極まりない。

保守的な審査員が第1楽章を評価しなかったのは、ホ長調の冒頭部の旋律が伝統的な主題労作に則っておらず、ソナタ形式も厳格でないためだろう。数多くの動機を組み合わせた第1主題は30小節近くの長さを有し、歌謡的ですらある。その曲想は、スイスの作曲家ヨアヒム・ラフの《交響曲第3番「森にて」》や《ピアノ協奏曲ハ短調》にも多くを負っている。第2楽章の主要主題は、第1楽章の動機を変形して作られている。ブルックナーのみならず、シューマン《交響曲第4番》、ベルリオーズ《幻想交響曲》、リスト《ファウスト交響曲》など、作品全体をひとつの主題でまとめる手法に影響を受けたとも指摘される。第3楽章は明らかに後世の作曲家、それもマーラーに影響を与えた。大規模なスケルツォ（そして全曲）のあちこちからはマーラー作品のあらゆる着想が聞こえてくる。ベートーヴェン《第9》に倣ったのか、第3楽章のモチーフを回想しつつ前進する第4楽章には、ブラームス《交響曲第1番》第4楽章の第1主題にも似た主題が登場する。

作曲年代	1878～1880年
初演	1989年3月4日、ゲルハルト・ザムエルの指揮、シンシナティ・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ2、トライアングル、シンバル、弦楽

PROGRAM

B

第1908回

サントリーホール

2/20 水 7:00pm

2/21 木 7:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.4

コンサートマスター | 篠崎史紀

ストラヴィンスキー

幻想曲「花火」作品4 [4']

ストラヴィンスキー

幻想的スケルツォ 作品3 [12']

ストラヴィンスキー

ロシア風スケルツォ [4']

ストラヴィンスキー

葬送の歌 作品5 [12']

——休憩——

ストラヴィンスキー

バレエ音楽「春の祭典」 [35']

第1部 | 大地礼賛

I 序奏

II 春のきざし—乙女たちの踊り

III 誘拐

IV 春の踊り

V 敵の都の人々の戯れ

VI 賢人の行列

VII 大地へのくちづけ

VIII 大地の踊り

第2部 | いけにえ

I 序奏

II 乙女たちの神秘的なつどい

III いけにえの賛美

IV 祖先の呼び出し

V 祖先の儀式

VI いけにえの踊り

Program Notes | 藤田 茂

天才は天才を知るといふけれど、イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)の音楽に出会って心底驚いたひとりが、当時、フランス音楽界の大御所だったクロード・ドビュッシーだった。いわく、彼の音楽は子供っぽく野性的、しかし、きわめて洗練されている。本公演は、音楽界の「恐るべき子供」たるストラヴィンスキーのポートレートを凝縮して描く。

幻想曲「花火」作品4

ストラヴィンスキーが世界に羽ばたくきっかけになったのが《花火》である。すでに師であるリムスキー・コルサコフからは名目上、「卒業」していたが、いまだ師弟関係は密であり、この曲も師の娘の結婚祝いとして書き始められた。自伝によれば、この曲を書き上げて送付したところで、リムスキー・コルサコフは亡くなってしまい、楽譜は配達不可能のために返って来たという。しかし実際のところ、《花火》は師の死後、すなわち1908年6月以降にも作曲が継続して行われたらしい。真っ白なカンバスに直接、絵の具を塗りつけるがごとく、多彩な音色が音空間を飛び跳ねる。1909年の初演の場には、セルゲイ・ディアギレフがいた。この伝説の興行師はやがてロシア・バレエ団を結成し、その座付き作曲家としてストラヴィンスキーをフランスへ、そして、世界に連れていくことになる。

作曲年代	1908年5～6月（秋まで作曲が継続した可能性あり）
初演	1909年2月6日、サンクトペテルブルク、指揮者アレクサンドル・ジロティの主宰するジロティ演奏会にて
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット3（バス・クラリネット1）、ファゴット2、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、グロッケンシュピール、ハープ2、チェレスタ1、弦楽

ストラヴィンスキー

幻想的スケルツォ 作品3

《花火》と双子の関係にある作品が、これと同日に初演された《幻想的スケルツォ》である。作曲のはじまりが《花火》よりも1年ほど早いからなのか、リズム面ではこちらのほうがずっとおとなしい。しかし、オーケストラの変幻自在の扱いは人を驚かせるに充分である。実際、ストラヴィンスキー自身、この曲におけるリムスキー・コルサコフやチャイコフスキーを介したメンデルスゾーンの影響を語りながらも、後年までこのスケルツォに愛着をもっていた。後にバレエに仕立てられたときにメーテルリンクの『蜜蜂の生活』が台本のベースとなったため、この曲にも蜂の飛翔や闘争のイメージが重ねられるようになったが、もともとは純粋な器楽曲として着想されたという。

作曲年代	1907年6月～1908年3月
初演	1909年2月6日、サンクトペテルブルク、指揮者アレクサンドル・ジロティの主宰するジロティ演奏会にて
楽器編成	フルート3（ピッコロ1、アルト・フルート1）、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット3（Dクラリネット1）、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、サスペンデッド・シンバル、ハープ3、チェレスタ1、弦楽

ロシア風スケルツォ

今度はぐっと趣を変えて、ハリウッドのロシア人となったストラヴィンスキーの作品。1939年にアメリカに渡ったストラヴィンスキーは、慣れない英語に四苦八苦しながらも持ち前の生命力で少しずつ仕事を広げていく。《ロシア風スケルツォ》は、このチャレンジな状況でストラヴィンスキーが咲かせた花である。最初、ある戦時プロパガンダ映画のために用意されたものが、次にジャズ・バンド用に仕立て直され、最後にフル・オーケストラ用に編曲された。《ペトルーシカ》を彷彿させる民謡調の節回しがチャミング。分かりやすさを第一に構成は意図的にシンプルにされ、同時に、録音されることを前提として当時の78回転レコードにうまく収まるよう長さが調整されている。

作曲年代	[ジャズ・バンド編曲版]1944年 [管弦楽編曲版]1945年
初演	[ジャズ・バンド編曲版]1944年9月5日、ポール・ホワイトマン・バンド、ラジオ放送 [管弦楽編曲版]1946年3月22日、サンフランシスコ交響楽団、作曲家自身の指揮
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、 テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シロフォン、タンブリン、トライアングル、サスペンデッド・ シンバル、ハープ1、ピアノ1、弦楽

ストラヴィンスキー

葬送の歌 作品5

そして、長らく幻の曲であった《葬送の歌》へ。タイトルが示すとおり、この作品は敬愛する師、リムスキー・コルサコフを亡くしたストラヴィンスキーが、1908年の夏、その死を悼んで作曲した音楽であった。しかし、その楽譜はサンクトペテルブルクでの初演後、革命の混乱のなかで失われた。そう信じられてきたのである。

しかし、2015年のサンクトペテルブルク音楽院の図書館改修工事の折、初演から100年以上の時を経て《葬送の歌》がついに発見される。図書館司書のシドレンコから連絡を受けた音楽学者のブラギンスカヤは、これが間違いなく自らも長年探しもとめていた楽譜であることを確認。これにより、《花火》や《幻想的スケルツォ》の「初期ストラヴィンスキー」と、ロシア・バレエ団の作曲家としての「世界のストラヴィンスキー」の間が、またひとつ豊かな音楽で埋められることになった。

興味深いのは、ストラヴィンスキーはこの曲を管楽合奏のために書いたと記憶していたのだが、出てきた楽譜はフル・オーケストラのためのものだったことである。死の厳粛な雰囲気の中、葬列が過ぎ去っていくかのように、さまざまな楽器が特徴的なモチーフを受け継いでいく。

作曲年代	1908年夏
初演	1909年1月30日、サンクトペテルブルク、フェリクス・ブルメンフェーリト指揮、シェルメーテフ伯爵の管弦楽団 [復活演奏] 2016年12月2日、サンクトペテルブルク、ワレリー・ゲルギエフ指揮、マリインスキー劇場管弦楽団
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット3(バス・クラリネット1)、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、タムタム、ハープ2、弦楽

ストラヴィンスキー

バレエ音楽「春の祭典」

《花火》また《幻想的スケルツォ》によってディアギレフに見出されたストラヴィンスキーは、やがてこの稀代^{きだい}の興行師が結成する「ロシア・バレエ団」の座付き作曲家としてパリに赴く。そしてこの異国の地で、後に彼の「三大バレエ」と称されることになる三つ組のバレエ音楽を作曲することになった。《春の祭典》はその最後を飾るものである。これに先行する《火の鳥》と《ペトルーシカ》がストラヴィンスキーを世界的な作曲家にしたとするなら、この《春の祭典》はストラヴィンスキーを20世紀音楽全体のアイコンにしたといえよう。

これだけ有名な作品であるから逸話には事欠かない。《春の祭典》は、しばしば互いに矛盾する関係者の証言に分厚く取り巻かれている。そのなかで現代にまで通じる問題を提起するのが、この音楽の自律性に関わる証言である。いったい《春の祭典》は、先にあったバレエ台本にあわせて作曲されたのか、それとも、音楽のほうに先にあり、バレエ台本はそこから引き出されたものであったのか。

ストラヴィンスキー自身は、後年になるほど後者が真実であることを強調するようになる。作曲家としては当然であろう。《春の祭典》は、1913年、ニジンスキーの振り付けによってまさしくバレエとして初演されたわけであるが、その後は、もっぱら演奏会用作品として生きることになったのだから。しかし、初演の舞台美術も担当したレーリヒは、まったく逆に、もう完成していた台本をストラヴィンスキーに与えたのが自分であることを、明言しているのである。

バレエの題材はキリスト教が入ってくる以前のスラヴ世界にあった原始宗教の儀式世界。それがまったくの後付けであると(後年のストラヴィンスキーのように)主張するのは、いまから考えればかなり無理があると思われる。後年のストラヴィンスキーが「音楽は何も表現しない」といったところで、少なくとも《春の祭典》の各部のタイトルと音楽との間に密な交流があることは、われわれの直観が教えるところである(本公演の曲目一覧p.8参照)。

またストラヴィンスキーの主張とは裏腹に、後年の学者が、この台本が舞台とするス

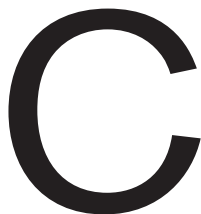
ラヴ世界に息づくリトアニア、ベラルーシ、ロシア、ウクライナの民謡の引用を《春の祭典》のなかに多数発見するに及んでは、この音楽の意図された表出性は、もはや否定しえないものとも感じられる。

しかし真偽がどうであれ、ストラヴィンスキーが《春の祭典》については、組曲を作成しようとしなかったことは指摘しておかねばならない。とくに《火の鳥》、また《ペトルーシカ》においては、登場人物の所作を追う「オノマトペ」(擬声語)のような部分が少なからずあって、ストラヴィンスキーはこれらをカットして「自分の音楽だけの」組曲に仕立てる要求を持たずにはいられなかった。しかし、《春の祭典》には、はじめからカットするような部分はなかった。あらゆる部分が全体を作り出す不可欠の構成要素としてそこにあるのだから。

実際、これこそが《春の祭典》の凄みである。最初こそ「不協和」という事態に圧倒されるかもしれないが、耳が開かれていくにつれ、《春の祭典》のなかには、いくつかの「ユニット」が存在していることに気づくだろう。それらは、ひとつの曲のなかで、あるいは、複数の曲にまたがって、何度も並び替えられ、その時々新しい組み合わせ、すなわちは、新しい響きを作り出していく。不協和は、これらのユニットの摩擦から発せられる火花のようなものなのだ。

ストラヴィンスキーの友人であったラムュは、作曲家の仕事場について興味深い観察を残している。「ストラヴィンスキーの机は、外科医の棚のようだった。いろいろな色のインク壺^{つぼ}がきわめて整然と並び、それらのインク壺^{めいせき}がさらに大きな秩序を形成している。(中略)そこにはストラヴィンスキーの内面の明晰さを反映するひとつの秩序があった」。《春の祭典》は、まさしくこの明晰さから生み出されたものに違いない。《春の祭典》を初演したモントゥーは、観客たちの怒号ゆえに、もはや音楽が聞こえなかったという。しかし、われわれは、もう見かけの不協和に騙^{だま}されたりはしない。その奥にある組み合わせの秘術に気づくとき、《春の祭典》とともに新しい音楽の地平が開かれる感動を体験することができるだろう。

作曲年代	1910～1913年
初演	1913年5月29日、パリ、シャンゼリゼ劇場、ピエール・モントゥー指揮、ロシア・バレエ団
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、ピッコロ1、アルト・フルート1、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン1)、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット3(バス・クラリネット1)、Esクラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット4(コントラファゴット1)、コントラファゴット1、ホルン8(ワグナー・チューバ2)、トランペット4、ピッコロトランペット1、バス・トランペット1、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓、トライアングル、タンブリン、タムタム、シンバル、ガイロ、アンティーク・シンバル、弦楽



第1907回

NHKホール

2/15 金 7:00pm2/16 土 3:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.4

ピアノ | カティア・ブニアティシヴィリ

コンサートマスター | 篠崎史紀

C

15 & 16, FEB. 2019

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18
[34']

I モデラート

II アダージョ・ソステヌート

III アレグロ・スケルツァンド

—— 休憩 ——

プロコフィエフ

交響曲 第6番 変ホ短調 作品111 [41']

I アレグロ・モデラート

II ラルゴ

III ヴィヴァーチェ

Artist Profile

カティア・ブニアティシヴィリ(ピアノ)



ジョージア生まれ。幼年期より姉グヴァンツァとともにピアノを学び、早くも6歳でオーケストラと共演し、すぐにヨーロッパ各国や米国から招かれて演奏を披露した。

トビリシ国立音楽院に学び、在学中の2003年にキエフで開かれたホロヴィッツ国際コンクールで特別賞を受賞。2005年に第3回トビリシ国際ピアノ・コンクールで入賞した際、審査員であったオレク・マイセンベルクの薦めでウィーン国立音楽大学へと転入した。2008年の第12回ルビンシュタイン国際ピアノ・コンクールでは第3位と最優秀ショパン演奏賞、聴衆賞を受賞している。

以来、ズービン・メータ、ネーメ・ヤルヴィ、パーヴォ・ヤルヴィ、ウラディーミル・アシュケナージら、著名な指揮者と共演を果たし、パリ管弦楽団をはじめトップレベルのオーケストラからソリストとしてたびたび招かれている。ザルツブルク音楽祭やBBCプロムス、マルタ・アルゲリッチ・プロジェクト他の音楽祭でも活躍する。2012年と2016年にドイツの音楽賞「エコー賞」を獲得。情熱豊かでエネルギッ

シュな演奏によって、国際的な注目を浴びている。パリ在住。N響とは2016年に続く共演。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

Program Notes | 一柳富美子

ロシア正教では楽器使用が禁じられ、無伴奏聖歌のみが歌われる。よってロシアの音楽文化では人の声による歌が重要な要因であり続けた。セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)とセルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)という一見対照的な音楽を紡ぎ出した2人の巨匠も、創作の根底には常に歌がある。本公演でも彼らの歌心を感じていただきたい。

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

ラフマニノフがこの曲に取り組んでいた時期、長年交際した初恋相手との別れや尊敬する文豪トルストイからの否定など辛い出来事が重なり、その結果、数年に渡る産みの苦しみを体験した。従来は「《交響曲第1番》初演失敗により鬱病に罹り、ダーリ博士の催眠療法のおかげでスランプから脱して曲が完成した」と解説されていたが、近年の研究では、交響曲の初演失敗からはすぐに立ち直ったこと、数回しか受けなかった催眠療法はこの作品の完成にほとんど影響しなかったこと、新進気鋭のオペラ指揮者として八面六臂の活躍をしており、病的な若者ではなかったことなどが明らかになっている。

ラフマニノフの従兄であり音楽院では師でもあったアレクサンドル・ジロティ(1863～1945)がヨーロッパでラフマニノフ作品を大々的に宣伝していたおかげで、本作は作曲前から内外の注目を集めていた。実際、先に完成した第2・3楽章の披露演奏会でまず大評判を呼び、作曲家自身の独奏による国内全曲初演だけでなく、ゲヴァントハウスにおける国外初演も大成功を収め、ラフマニノフの名は一躍欧州中に轟くこととなった。

第1楽章はソナタ形式。鐘の音を模したようなピアノ・ソロで始まる。第2楽章は3部形式。叙情的な緩徐楽章で、甘い旋律が全楽章を支配する。第3楽章は自由なロンド形式で、ピアノの華麗なロンド主題と、異国情緒あふれる美しい副主題とが絶妙に絡み合って、熱狂のうちに全曲を閉じる。

作曲年代	1898年夏～1901年4月
初演	[第2・3楽章] 1900年12月15日(旧ロシア暦12月2日) [全曲] 1901年11月9日(旧ロシア暦10月27日)、アレクサンドル・ジロティ指揮、作曲家自身の独奏 [国外初演] 1902年1月22日(旧ロシア暦1月9日)、アルトゥール・ニキシュ指揮、ジロティの独奏、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、弦楽、ピアノ・ソロ

交響曲 第6番 変ホ短調 作品111

プロコフィエフはロシア革命を機に出国した後にソ連社会へ復帰した、珍しい経歴を持つ。しかも最初の妻がスパイ容疑で収容所送りとなったり、資料が内外に拡散したりで演奏も研究も進まず、伝記情報も不確かだった。ソ連へ復帰した年月すら曖昧で、いまだに1935年説と1936年説が流布しているが、モスクワで家族と共にホテル住まいを始めたのが1935年夏、自宅を構えたのが1936年5月なので、正式復帰は1935年となる。そしてプロコフィエフは、第2次世界大戦をソ連国内で体験することになる。

プロコフィエフの交響曲の代表作と言われる《第5番》(1944)が第2次世界大戦の戦勝ムードを反映しているとしたら、戦後すぐに書かれたこの《第6番》は、一般に戦争の犠牲者への哀悼と過ぎ去った悲劇を描いたものと位置づけられている。かねてよりプロコフィエフの新作初演を熱望していたムラヴィンスキーの指揮による1947年の初演は、聴き易い曲ではなかったにもかかわらず、レニングラードの聴衆には熱狂的に受け容れられ、各紙の批評でも「特筆すべき音楽出来事」と高評価を得た。しかしこの作品の深い内面性は当時のソ連音楽界には理解されず、当局の名を借りた作曲家同盟上層部による事実上の巨匠潰しである1948年の「ジダーノフ批判」でこの曲が形式主義批判のやり玉に挙がった。スターリン死後の1958年に「批判」は事実上撤回されたが、今日に至るまで、この《第6番》の演奏機会は決して多くない。

スケルツォ楽章を欠く3楽章形式。曲が後半に進むにつれ、求心力を増していく不思議な構成である。1941年から亡くなるまで全精力を傾注して取り組んでいた《歌劇「戦争と平和」》のさまざまなモチーフやイントネーションがこの曲の至る所に現れているのも興味深い。金管のユニゾンで始まるユニークな第1楽章はアレグロ・モデラート。ソナタ形式の2つの主題は類似しており、プロコフィエフの言葉を借りれば「叙情的だったり厳粛だったりと不安な性格」である。ラルゴの第2楽章は《戦争と平和》の「ナターシャとアンドレイの愛の主題」に酷似した緩徐の旋律が歌われ、「より明るくて旋律的」。そしてヴィヴァーチェの第3楽章はロンド・ソナタ形式で、古典派の快速楽章を連想させる躍動感がある。終結近くで第1楽章第2主題が回顧された後、華麗に終わる。

作曲年代	1945年6月～1947年2月17日
初演	1947年10月11日、レニングラード(現 Санкт-Петербург)、エフゲーニ・ムラヴィンスキー指揮、レニングラード・フィルハーモニー交響楽団
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、Esクラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、小太鼓、ウッド・ブロック、大太鼓、タムタム、ハープ1(指揮者の意向によりハープ2で演奏)、ピアノ1(チェレスタ1)、弦楽

N響百年史

Prologue 第二回 ―源流は「おもてなしの奏楽」にあり― 片山杜秀 ― Morihide Katayama

今年にはNHK交響楽団の前身となる新交響楽団結成から九三年。来るべき創立百周年に向け、NHK・FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点でひもときます。二〇一八／二〇一九シーズンは「Prologue」として、幕末から筆を起こし、大正末年になって本格的プロ・オーケストラが誕生するまでの時代の流れを描きます。

紀元二千六百年奉祝交響楽団

明治政府は、キリストが誕生したとされる年を元年とする西暦のみを用いることを潔しとしなかった。日本はキリスト教国ではないからである。かといって、移ろいやすい元号では、何十年単位で物事を考えるときに、いかにも不便だ。西暦を用いる西洋列強とも釣り合いがとれない。

そこで思い出されたのが「皇紀」。より正確に言うところ「神武天皇即位紀元」だ。『日本書紀』の記述から推定して西暦に換算すると、初代天皇の神武が^{かしはら}橿原で即位したのは紀元前660年になる。「皇紀」を用いれば、西暦よりも数字を大きくすることができる。歴史と伝統において、日本が西洋に優越する感じもしてくる。大きいことはいいことだ。実証不能な神話の年代でもかまうまい。「皇紀」は、明治初期に、法律によって、日本の正式な紀元として定められた。

それから時を経て、西暦1940(昭和15)年。「西暦+660」が「皇紀」なので、その年は「皇紀2600年」だった。日本にとっては世界に対する国威発揚の絶好の機会。東京オリンピック、札幌オリンピック、東京万国博覧会が、「皇紀2600年」の国際的催事として予定された。ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の日本ツアーができないかと、外交的に工作されたこともあったようだ。ところが、みな夢と消えた。1937年からの日中戦争と1939年からの第2次世界大戦で、日本も世界もそれどころではなくなった。

だが、やはり「皇紀2600年」。日本政府としては何か国際的催事をやらなくては格好が付かない。そこで思い付かれたのが「奉祝管

弦楽曲」の海外委嘱である。オーケストラを欧米から呼ぶのは困難だが、楽譜だけなら大丈夫。かくして、ドイツのリヒャルト・シュトラウス、イタリアのイルデブランド・ピッツェッティ、イギリスのベンジャミン・ブリテン、フランスのジャック・イベール、ハンガリーのシャーンドル・ヴェレシュの新作が集まった。このうちブリテンの曲は《鎮魂交響曲(シンフォニア・ダ・レクイエム)》と題されていた。日本側は祝典性等々に欠けると判断し、演奏曲から外した。残る4曲はまとめて「皇紀2600年」の師走に東京の歌舞伎座で世界初演され、その後一般の聴衆向けの演奏会でも披露された。

4曲の指揮者は1曲ごとに違った。山田耕筈や橋本國彦らである。演奏したオーケストラは「紀元二千六百年奉祝交響楽団」。その実体は？ 東京の演奏団体の選抜メンバーによる大合同の楽団である。リヒャルト・シュトラウスの新作のような巨大編成を要求する楽曲もあって、ひとつのオーケストラでは人数を賄えなかつ

たせいもある。だが、それだけではない。何しろ太平洋戦争開始前年の1940年なのだ。挙国一致と総動員が国家のスローガンである。音楽界も一丸となるべし。「紀元二千六百年奉祝交響楽団」はそうした時局の要請に応えてもいた。

「紀元二千六百年奉祝交響楽団」は総勢約150人。新交響楽団(現NHK交響楽団)と中央交響楽団(現東京フィルハーモニー交響楽団)と東京放送管弦楽団(日本放送協会東京放送局の専属オーケストラ)、その他3団体のメンバーで組織された。

その他3団体とは？ まず星^{せい}桜^{おう}吹奏楽団である。星は日本陸軍、桜は日本海軍の象徴。星桜吹奏楽団とは陸海軍軍楽隊のOB吹奏楽団だった。OBといっても軍楽隊の除隊は一般に早いので、青壮年期の演奏家として盛りの人々の集まりである。それから東京音楽学校管弦楽団。これは東京藝術大学音楽学部
の前身である東京音楽学校の教官を主体と



R.シュトラウス《紀元2600年祝典曲》をヘルムート・フェルマーの指揮で演奏する紀元二千六百年奉祝交響楽団(1940年12月7日、東京・歌舞伎座)

するオーケストラ。もうひとつは宮内省楽部。管楽器や打楽器のパートに、合わせてたった4人だが、参加している。

宮内省楽部とは、もちろん普段は宮中で雅楽をやる音楽家たちの集団だ。今日の宮内庁式部職楽部である。実はそれが、近代日本の西洋式オーケストラの源流のひとつでもある。

「二刀流」を義務づけられた 宮内省楽部

そもそも雅楽とは何か。今日に伝わる雅楽は平安時代に完成したもの。その時代から楽器編成や楽曲や演奏スタイルをもう約1000年も保っている。音楽は世界で原始の時代からあるだろうが、文字と違って残りにくい。『論語』や『聖書』に音楽のことがたくさん書かれていても、実際の曲や演奏についてはもはやわからない。その意味で、雅楽は現在に残る世界最古のクラスの合奏音楽と言える。たとえば、中国の唐の時代に玄宗皇帝と楊貴妃が聴いていた音楽は、中国には伝わっていないだろう。ところが、唐から伝わったとされる楽曲は、日本の雅楽に残っている。驚くべきことだ。

その雅楽は、『源氏物語』などを読めば、平安時代には天皇や皇族や貴族の重要な嗜好（たしな）事であり娯楽であったとわかる。宮中や寺社の儀式にも付き物だった。しかし、もともとそういうものかという、恐らく違う。

平安時代の前、奈良時代にもすでに雅楽の源が栄えていた。その時代の言わば「原“雅楽”」は、今日に伝わる平安時代の雅楽よりも、楽器の種類も全体の人数も、どうやらもっとずっと多かった。大管弦楽だった。巨大な国家予算が雅楽の維持発展のために投じられ、

しかも雅楽のオーケストラは何通りにも分かれていた。朝鮮半島の音楽、唐の音楽、渤海の音楽など、世界のさまざまな地域の音楽や舞踊を実演する専門グループが存在した。

何のために？ 奈良時代の天皇が、世界中の音楽を聴きたくて、贅（ぜい）沢（たく）をしていたのか。そうではあるまい。奈良時代の奈良の都と言えば、シルクロードの東の終点。文物だけではない。外国人も奈良にやってきた。彼らは当時の日本国家にとって、日本文明発展のために欠くべからざる宝だった。外交使節も、商人も、明治の「文明開化」の時代の表現になぞらえれば、日本に学問文化や科学技術を伝えるためにきた「御雇い外国人」もいたであろう。東大寺の大仏開眼の式典にはベルシャ人まで参加していたくらいなのだから。

彼らは、長期滞在し、あるいはついに骨を埋める異国日本で、何を聴きたいか。ふるさは遠きにありて思うもの。そう、自国の音楽を懐かしみたい。奈良朝はその期待に応えたのだろう。それが各国・各地域ごとに分かれて技芸の習練を求められた奈良時代の雅楽の姿であろう。雅楽とは外国人を「おもてなし」するための文化であったかと思われる。

しかし、時代が下ると、その必要はなくなっていった。平安時代になると、日本は内向きになり、鎖国状態に入ってゆく。外国人はあまり来ない。おもてなしの機会も減る。雅楽は縮小され、日本人のための音楽に変成してゆく。それが今日に伝わる平安の雅楽なのである。

それから長い時代を経て、日本は奈良時代を再現するかのように、外国に開かれた天皇中心の国家に、再びなった。明治維新と文明開化である。天皇は宮中にたくさんの外国人を迎えねばならない。外交官と社交するのは

宮廷のミッションだ。

でも、その外国人は、奈良時代のときと違って東洋人ではなく西洋人であった。明治の宮廷に改めて結集させられた雅楽の音楽家たちは、宮中の儀礼や娯楽のために伝統的な雅楽を演奏し続けたが、それだけでは済まなかった。西洋人のおもてなしのためには、雅楽では不十分である。彼らのふるさとの音楽を聴いてもらわねば失礼なのだ。西洋の管弦楽で西洋の楽曲を演奏して、おもてなししなければ、宮中午餐会も晩餐会も成立しない。

西暦1874年＝明治7年＝皇紀2534年、宮中の雅楽の人たちは海軍軍楽隊から西洋音楽を学び始めた。はじめは吹奏楽、やがて弦楽器の演奏も習いだした。1879(明治12)年になると、「御雇い外国人」のアメリカ人、ルーサー・ホワイティング・メーソンから管弦楽合奏の指導を受けるようになる。1881(明治14)年7月8日の宮中午餐会では《君が代》《英

国国歌》《オーストリア国歌》等を演奏した記録がある。それはつまり外交官のおもてなしであった。編成は、ヴァイオリン4、ヴィオラ2、チェロ1、コントラバス1、フルート1、クラリネット1という。この頃から、宮中ではいつも西洋式管弦楽が実践され、楽器編成を次第に拡張してゆき、宮内省楽部の人々は雅楽と西洋管弦楽の二刀流を義務づけられた。

日本の近代オーケストラの源流のひとつ。それは、奈良時代の再現としての「おもてなしのための奏楽」であった。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『五箇条の誓文』で解く日本史』ほか著書多数。



天皇・皇后両陛下ご臨席のもと西洋音楽を演奏する宮内庁楽部(2017年6月22日、皇居東御苑の桃華楽堂にて)
提供:宮内庁

次回予告

次回(2019年5月号掲載予定)は大学オーケストラをはじめとするアマチュア・オーケストラの果たした役割を、西洋の状況と比較しながら論じます。

Overview

4月定期公演

意欲的な作品が並ぶ4月定期公演は
どれも必聴のプログラム

4月定期公演のAプロではチェコ出身の気鋭、ヤクブ・フルシャがN響との初共演を果たす。ニーチェの著作に触発されたR. シュトラウス《交響詩「ツァラトゥストラはこう語った」》、クレオパトラを題材とした詩に由来するベルリオーズ《叙情的情景「クレオパトラの死」》、マエストロ同郷の作曲家ヤナーチェクの代表作であり、村

上春樹の『1Q84』にも登場した《シンフォニエッタ》の3曲が並ぶ。《クレオパトラの死》ではヴェロニク・ジャンスの情感豊かな歌唱が聴きもの。

Bプロは下野竜也が意欲的なプログラムを披露する。メインは今年生誕100周年を迎える20世紀ロシアの作曲家ヴァインベルクの《交響曲第12番「ショスタコーヴィチの思い出に」》。近年再評価が進むヴァインベルクが、友であり師でもあったショスタコーヴィチへのオマージュとして書き上げた作品である。これにワディム・グルズマンの独奏によるショスタコーヴィチ《ヴァイオリン協奏曲第1番》が組み合わされる。

Cプロは山田和樹が平尾貴四男《交響詩曲「砧」》、矢代秋雄《ピアノ協奏曲》(独奏は河村尚子)、シェーンベルク《交響詩「ペレアスとメリザンド」》を指揮する。2曲の邦人作品はいずれもN響が初演した楽団ゆかりの曲。シェーンベルク作品では後期ロマン派スタイルの豊かなサウンドを堪能できるだろう。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

4/13(土) 6:00pm

4/14(日) 3:00pm

NHKホール

R. シュトラウス／交響詩「ツァラトゥストラはこう語った」作品30

ベルリオーズ／叙情的情景「クレオパトラの死」*

ヤナーチェク／シンフォニエッタ

指揮：ヤクブ・フルシャ

ソプラノ：ヴェロニク・ジャンス*

B

4/24(水) 7:00pm

4/25(木) 7:00pm

サントリーホール

ショスタコーヴィチ／ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77

ヴァインベルク／交響曲 第12番 作品114「ショスタコーヴィチの思い出に」(1976)

指揮：下野竜也

ヴァイオリン：ワディム・グルズマン

C

4/19(金) 7:00pm

4/20(土) 3:00pm

NHKホール

平尾貴四男／交響詩曲「砧」(1942)

矢代秋雄／ピアノ協奏曲(1967)

シェーンベルク／交響詩「ペレアスとメリザンド」作品5

指揮：山田和樹

ピアノ：河村尚子

PROGRAM

A

Concert No.1906 **NHK Hall****February****9(Sat) 6:00pm****10(Sun) 3:00pm**conductor | **Paavo Järvi**violin | **Alena Baeva**guest concertmaster | **Kei Shirai***

◆**Kei Shirai:** Kei Shirai was born in Trinidad and Tobago in 1983, and studied music at the Music High School Attached to the Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, and Tokyo University of the Arts. He went to Vienna in 2007 for further studies at the Universität für Musik und darstellende Kunst Wien, and then became a contract member of the Wiener Staatsopernorchester. Since leaving the orchestra, he has been invited to perform as guest concertmaster by orchestras both at home and abroad including the Czech Philharmonic Orchestra and WDR Sinfonieorchester Köln.

Richard Strauss**Violin Concerto D Minor Op. 8 [30']**

I Allegro

II Lento, ma non troppo

III Rondo: Presto

— intermission —

Hans Rott**Symphony No. 1 E Major [56']**

I Alla breve

II Sehr langsam

III Frisch und lebhaft

IV Sehr langsam—Belebt

Artist Profiles**Paavo Järvi, conductor**

© Jukka Rautava

The Estonian conductor Paavo Järvi commences his fourth season as Chief Conductor of the NHK Symphony Orchestra and is also Artistic Director of The Deutsche Kammerphilharmonie Bremen since 2004.

Commencing from the 2019/20 season Järvi will be Chief Conductor and Music Director of the Tonhalle-Orchester Zürich, while he concluded his highly successful tenure as Music Director of the

Orchestre de Paris in Summer 2016. He is also Conductor Laureate of the Frankfurt Radio Symphony and Music Director Laureate of the Cincinnati Symphony Orchestra. In addition to his permanent positions, Järvi is in much demand as a guest conductor, appearing regularly with the Berliner Philharmoniker, Münchner Philharmoniker, London's Philharmonia,

Staatskapelle Berlin and Staatskapelle Dresden. Other guest engagements include the Royal Concertgebouw Orchestra, Wiener Philharmoniker, New York Philharmonic and Teatro alla Scala in Milan.

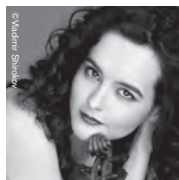
He is a dedicated supporter of Estonian composers and Artistic Adviser to the Estonian National Symphony Orchestra. Each season concludes with a week of performances and master-classes at the Pärnu Music Festival in Estonia, which was founded by Paavo Järvi in 2011. As a festival celebrating the orchestra at its heart, he created the Estonian Festival Orchestra which has become the uncontested highlight of the summer season. He was awarded the Order of the White Star by the President of Estonia in 2013 for his outstanding contribution to Estonian culture.

With an extensive discography, Paavo Järvi has won a Grammy Award for his recording of Sibelius' Cantatas and was named Artist of the Year by both *Gramophone* and *Diapason* magazines. He has also been appointed Commandeur de L'Ordre des Arts et des Lettres by the French Ministry of Culture for his contribution to music in France and the Sibelius Medal for his work in bringing attention to the Finnish composer's music during his tenure with the Orchestre de Paris.

Born in Tallinn, Estonia, Paavo Järvi studied percussion and conducting at the Tallinn School of Music. In 1980, he moved to the USA where he continued his studies in the 80s at the Curtis Institute of Music and at the Los Angeles Philharmonic Institute with Leonard Bernstein.

A
9 & 10 FEB. 2019

Alena Baeva, violin



Alena Baeva was born in Almaty, Kazakhstan. She studied under Eduard Grach at the Central School of Music (an affiliate of the Moscow State Tchaikovsky Conservatory), and then at the Moscow Conservatory itself. In 2003, she studied in France by the recommendation of Mstislav Rostropovich, and participated in the Seiji Ozawa International Academy Switzerland from 2007. She won the Grand

Prix at the 12th International Henryk Wieniawski Competition in 2001, and in 2004, she won the Grand Prix at the Moscow International Paganini Competition and a Special Prize allowing her to perform on the 1723 Stradivarius for one year, the violin that Wieniawski himself played. She was awarded both the Gold Medal and the Audience Prize at the 3rd Sendai International Violin Competition in Japan in 2007. She has been regularly invited by orchestras such as the Mariinsky Theatre Orchestra and the Belgian National Orchestra to work as a soloist under the baton of Gergiev and Fedoseyev, to name a few. She has been attracting audiences with her free and easy tone and emotionally-rich expressions. With her wide repertoire, she works with renowned artists including Martha Argerich in chamber music, and has released CDs of concertos by Bruch and Shostakovich as well as sonatas by Poulenc and Prokofiev. This is her debut performance with the NHK Symphony Orchestra.

[Alena Baeva by Shinnosuke Nagai, music journalist]

Richard Strauss (1864–1949)

Violin Concerto D Minor Op. 8

Richard Strauss completed Violin Concerto in D Minor, Op. 8 in 1882 when he was only seventeen years old. It was dedicated to Benno Walter, the concertmaster of the Munich Court Orchestra where Strauss' father was a horn player. The work was first performed on December 5, 1882, with Strauss playing the piano reduction of the orchestra parts. The premiere of the concerto with orchestral accompaniment did not take place until March 4, 1890.

Strauss' Violin Concerto is written in the Romantic tradition, in which the rich sonority of the violin is explored. The first several notes of the solo violin, which enters for the first time after a brief fanfare-like phrase played by the full orchestra, appear, for instance, in the lowest register of the violin. This makes it possible for the audience to immediately recognize the fully projecting sound that the violin is capable of producing. A similar compositional technique can be found at the beginning of Tchaikovsky's well-known Violin Concerto in D Major, Op. 35, composed in 1878 only a few years before Strauss wrote his violin concerto.

Hans Rott (1858–1884)

Symphony No. 1 E Major

In the history of music there were a number of composers whose lives ended prematurely. Some enjoyed a high reputation before they passed away, but the others never had an opportunity to make their names known despite their tremendous talent. Hans Rott was one of those gifted-but-unknown composers who lost their lives at a young age. He was just twenty-five years old when he died of tuberculosis. Rott was not even fully active as a composer in the final years of his short life. He encountered a series of devastating events and suffered from severe mental problems.

Rott received his formal education in music at the Vienna Conservatory between 1874 and 1878. One of his teachers there included Anton Bruckner, who gave organ lessons to Rott. He also studied composition at the conservatory — his composition teacher was the same as that of Gustav Mahler's. In the final stage of his studies at the conservatory Rott entered a composition competition, submitting the first movement of Symphony No. 1 in E Major. Unfortunate to Rott, the jury members did not see any potential in it. After completing the symphony in 1880, Rott showed the work to Johannes Brahms. The latter, however, wholly disregarded it. This was a sad event for Rott, for he must have had great respect for Brahms — the final movement of Rott's Symphony No. 1 contains melodic materials similar to those in the finale of Brahms' Symphony No. 1 as well as his *Academic Festival Overture*. In the end, Rott's Symphony No. 1 never received a public performance during the composer's lifetime. Nevertheless, there were some musicians who recognized the ingenuity of Rott's music. This included Mahler, whose Symphony No. 1 in D Major consists of themes that resemble those in the third movement of Rott's symphony.

Akira Ishii

Professor of Keio University. A Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

B

Concert No.1908 Suntory Hall

February

20(Wed) 7:00pm

21(Thu) 7:00pm

conductor | Paavo Järvi | for a profile of Paavo Järvi, see p.40

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

Igor Stravinsky

“Feu d’artifice,” fantasy Op. 4 [4’]

Igor Stravinsky

“Scherzo fantastique,” Op. 3 [12’]

Igor Stravinsky

“Scherzo à la russe” [4’]

Igor Stravinsky

“Chant funèbre,” Op. 5 [12’]

— intermission —

Igor Stravinsky

“Le sacre du printemps,” ballet [35’]

[1^{ère} partie] L’adoration de la terre

I Introduction

II Les augures printaniers—Danses des adolescentes

III Jeu de rapt

IV Rondes printanières

V Jeux des cités rivales

VI Cortège de sage: Le Sage

VII Adoration de la terre

VIII Danse de la terre

[2^{nde} partie] Le sacrifice

I Introduction

II Cercles mystérieux des adolescentes

III Glorification de l’élue

IV Évocation des ancêtres

V Action rituelle des ancêtres

VI Danse sacrée

Program Notes | Akira Ishii

Igor Stravinsky (1882–1971)

“Feu d’artifice,” fantasy Op. 4

Stravinsky’s *Feu d’artifice* (*Fireworks*), Op. 4 is one of the early works by the composer, written in 1908. The piece was a gift for his composition teacher Nikolai Rimsky-Korsakov whose daughter was about to get married. The composition is exceedingly short, lasting less than four minutes. The scale of it, on the contrary, is grand. It calls for piccolo, two flutes, two oboes (the second doubling English horn), three clarinets (the third doubling bass clarinet), two

B

20 & 21. FEB. 2019

bassoons, six French horns, three trumpets, three trombones, tuba, timpani, cymbals, bass drum, triangle, glockenspiel, two harps, celesta, and strings. The work is also filled with novel musical ideas, which would soon become the hallmark of Stravinsky's large orchestral works.

Igor Stravinsky (1882–1971)

“Scherzo fantastique,” Op. 3

Scherzo fantastique, Op. 3 is Stravinsky's second work for orchestra, composed between June 1907 and March 1908. It has been believed that Stravinsky had programmatic intentions for the work. The publication of the piece indeed carried descriptive words over the piece. On the other hand, it has also been suggested that *Scherzo fantastique* is instrumental music without any connotation of specific meanings, images, or events. The composition is relatively short; it normally takes a little more than ten minutes to be performed. Near the end of the piece, numerous wind instruments play tremolo figures with flutter-tonguing, producing swiftly vibrating sound, reflecting Stravinsky's innovative way of orchestration. The first performance of *Scherzo fantastique* took place in St. Petersburg on February 6, 1909.

Igor Stravinsky (1882–1971)

“Scherzo à la russe”

For Stravinsky 1939 was a devastating year. His first wife Katya died of tuberculosis in March, to whom Stravinsky had been married for thirty-three years (Stravinsky had an ongoing love affair with Vera de Bosset since 1921 but he undoubtedly had a deep affection for his wife). The composer himself was sick and was hospitalized for five months. His mother then passed away while he was still ill. Stravinsky was finally fed up with his life in Paris and decided to leave Europe for the United States of America, arriving there in September 1939. He eventually settled in Hollywood and obtained American citizenship in 1945. There Stravinsky composed *Scherzo à la Russe* as film music between 1943 and 1944. The piece, however, was never utilized in the movie. He was then commissioned to write a jazz piece, for which he reworked the film music. In 1946 Stravinsky made the piece appropriate for symphonic concerts.

Igor Stravinsky (1882–1971)

“Chant funèbre,” Op. 5

Stravinsky's *Chant funèbre* (*Funeral Song*), Op. 5 is the third composition Stravinsky wrote for orchestra in the year 1908. The piece was to commemorate the death of Nikolai Rimsky-Korsakov, whom Stravinsky highly regarded. Just like the two orchestral pieces he composed prior to *Chant funèbre*, the work is scored for a large orchestra. Unlike the two earlier orchestral pieces of 1908, however, *Chant funèbre* never really departs from the solemn mood established at its beginning, avoiding the splendiferous sound of his other early orchestral works. This is reflected in Stravinsky's later recollection of the piece. He says, “All the solo instruments of the orchestra filed past the tomb of the master in succession, each laying down its own melody as its wreath.”

The most amazing aspect of *Chant funèbre* is the recent discovery of it. The composition

premiered on January 30, 1909, after which the whereabouts of the score and orchestra parts were unknown for over one hundred years. It was not until the year 2015 the orchestral parts were finally found in a small room in the library of the St. Petersburg Conservatory. The modern premier of the composition took place on December 2, 2016.

Igor Stravinsky (1882–1971)

“Le sacre du printemps,” ballet

The premieres of *Scherzo fantastique*, Op. 3 and *Feu d’artifice* (*Fireworks*), Op. 4 on February 6, 1909 was a successful event for the composer. The compositions were not only well received but they were above all also heard by Sergei Diaghilev, a Russian ballet impresario who later commissioned Stravinsky to write a series of ballet music including *Loiseau de feu* (*The Firebird*), *Petrushka*, and *Le sacre du printemps* (*The Rite of Spring*). Stravinsky composed *The Rite of Spring* for the 1913 season of Diaghilev’s Ballet Russes, a ballet company based in Paris. The first performance of the work took place on May 29, 1913 at the *Théâtre des Champs-Élysées* in Paris. The choreographer for the premiere was Vaslav Nijinsky. As its subtitle “Pictures from Pagan Russia in Two Parts” suggests, the ballet was inspired by Russian culture, depicting primitive rituals celebrating the advent of spring. It consists of fourteen pieces in two parts. The titles in Part I (“Adoration of the Earth”) are: 1) Introduction; 2) The Augurs of Spring: Dances of the Young Girls; 3) Ritual of Abduction; 4) Spring Rounds; 5) Ritual of the Rival Tribes; 6) Procession of the Sage: The Sage; 7) Kiss of the Earth; and 8) Dance of the Earth, and those in Part II (“The Sacrifice”), 1) Introduction; 2) Mystic Circles of the Young Girls; 3) Glorification of the Chosen One; 4) Evocation of the Ancestors; 5) Ritual Action of the Ancestors; and 6) Sacrificial Dance. According to the composer, the whole work was “unified by a single idea: the mystery and great surge of the creative power of Spring,” but the ballet is really a collection of various scenes, lacking a unified single story found in typical traditional ballets.

The premiere of *The Rite of Spring* was scandalous. It is said that the audience was already restless soon after the ballet started. Scoffing became more apparent in the sections where dissonant harmony and pounding percussive rhythms are abundant. The dancers on the stage did not help people to stop ridicule the performance. The ballet dancers wore unconventional costumes that lacked grace, and to many their choreographic movements were simply bizarre. It is not entirely clear whether the audience was upset with Stravinsky’s music or Nijinsky’s choreography, but it is certain that Stravinsky’s music was different and left a strong impression on people.

The Rite of Spring is scored for a gigantic orchestra, calling for piccolo, three flutes (the third doubling piccolo), alto flute, four oboes (the fourth doubling English horn), English horn, E-flat clarinet, three clarinets (the third doubling bass clarinet), bass clarinet, four bassoons (the fourth doubling contrabassoon), contrabassoon, eight French horns (the seventh and eighth doubling Wagner tubas), piccolo trumpet, four trumpets, bass trumpet, three trombones, two tubas, timpani, triangle, tambourine, tam-tam, guiro, bass drum, crotales, cymbals, and strings. At the beginning of the piece, the solo bassoon plays a mysteriously sounding melody in the extremely high register of the instrument, immediately drawing the listener’s attention. Stravinsky also avoids writing tuneful melodies and places much emphasis on rhythm. *The Rite of Spring* is after all a ballet.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.42

PROGRAM

C**Concert No.1907 NHK Hall****February****15(Fri) 7:00pm****16(Sat) 3:00pm**

conductor | **Paavo Järvi** | for a profile of Paavo Järvi, see p.40piano | **Khatia Buniatishvili**concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

Sergei Rakhmaninov
Piano Concerto No. 2 C Minor
Op. 18 [34']

- I Moderato
- II Adagio sostenuto
- III Allegro scherzando

— intermission —

Sergei Prokofiev
Symphony No. 6 E-flat Minor
Op. 111 [41']

- I Allegro moderato
- II Largo
- III Vivace

Artist Profile

Khatia Buniatishvili, piano

Georgian-born Khatia Buniatishvili began learning the piano together with her elder sister Gvantsa in her early childhood, and was invited to European nations as well as the U.S. to perform publicly immediately after playing with a professional orchestra at the age of six. During her studies at Tbilisi State Conservatoire, she won a special prize at the Horowitz International Competition for Young Pianists in Kiev in 2003. She then moved to University of Music and Performing Arts in Vienna by the recommendation of Oleg Maisenberg who sat on a jury for the 2005 Piano Competition in Tbilisi, where she won a prize. She was the winner of the bronze medal at the 12th Arthur Rubinstein Piano Master Competition in 2008, and she was also recognized as the Best Performer of a Chopin piece and Audience Favourite. Since then she has worked with famed conductors including Zubin Mehta, Paavo Järvi and Vladimir Ashkenazy, and has frequently been invited by leading orchestras such as the Orchestre de Paris. She often appears in

the Salzburg Festival, the Proms and the Lugano Festival & Martha Argerich Project, among many others. She won the ECHO Klassik Award from Germany's Music Industry Association in 2012 and 2016. She has garnered world attention for her impassionate and energetic performances. She returns to the NHK Symphony Orchestra after a two-year absence.

[Khatia Buniatishvili by Yoichi Iio, music journalist]

Program Notes | Akira Ishii

Sergei Rakhmaninov (1873–1943)

Piano Concerto No. 2 C Minor Op. 18

Piano Concerto No. 2 in C Minor, Op. 18 is undoubtedly the most popular composition today by Sergei Rakhmaninov. Together with Tchaikovsky's Piano Concerto No. 1 in B-flat Minor, Op. 23 the piece represents the rich repertoire of the concertos for piano and orchestra of the late Romantic period.

Rakhmaninov's Piano Concerto No. 2 consists of three movements, comprising full of beautiful melodies. Among them the most memorable one is perhaps the melodic theme that appears near the end of the composition. The way it is presented — the full statement of the tune is waited to be introduced until nearly the end of the composition — is strikingly similar to the manner Tchaikovsky adopted for the very moving melody that comes along in the final movement of the above-mentioned concerto.

Sergei Prokofiev (1891–1953)

Symphony No. 6 E-flat Minor Op. 111

Sergei Prokofiev was undoubtedly one of the most important figures of the early twentieth century. He was a prolific composer, writing fourteen operas (including several unfinished works), nine ballets, at least seven symphonies, six piano concertos, two violin concertos, and other numerous orchestral pieces of various types. Many are popular and frequently performed today. They include *Romeo and Juliet*, Op. 64, *Cinderella*, Op. 87, *Lieutenant Kijé*, and *Peter and the Wolf*, Op. 67. His symphonies and concertos are also regularly taken up by major symphony orchestras of the world. In addition, his piano sonatas — he wrote altogether more than eleven such works counting the unfinished ones — are increasingly becoming an essential part of the piano literature.

Symphony No. 6 premiered on October 11, 1947. The Symphony consists of only three movements. For each of the movements the composer had left us the following comments: “The first movement is agitated, at times lyrical, at times austere; the second movement, Largo, is brighter and more tuneful; the finale, rapid and in a major key, is close in character to my Fifth Symphony, save for reminiscences of the austere passages from the first movement.” Despite these words the overall character of the symphony is somber. It has been suggested that Prokofiev wanted to reflect the difficult and painful times his fellow citizens experienced during the Second World War.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.42

C

15 & 16, FEB. 2019



公演報告

2018年 12 定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS
IN DECEMBER, 2018

月

12月は3人の指揮者が登場。

ヴェデルニコフによる冬にちなんだロシア作品特集、

フェドセーエフのクリスマスシーズンにふさわしい《くるみ割り人形》、

ヘンゲルブロックはオール・バッハ・プログラムを披露し、

いずれもマエストロの個性が光る公演となりました。

Aプログラム スヴィドフ／組曲「吹雪」— ブーシキン原作の映画から、スクリャービン／ピアノ協奏曲 嬰へ短調 作品20、ガラスノフ／交響曲 第7番 へ長調 作品77「田園」(2018年12月1、2日、NHKホール) **Bプログラム** チャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」作品71(2018年12月12、13日、サントリーホール) **Cプログラム** バッハ／組曲 第4番 二長調 BWV1069、バッハ(シェーンベルク編)／前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552「聖アン」、バッハ／マニフィカト 二長調 BWV243(クリスマス用挿入曲つき)(2018年12月7、8日、NHKホール)



(左) Aプロの指揮を執ったアレクサンドル・ヴェデルニコフ
(右) Aプロのスクリャービン《ピアノ協奏曲》でソロを務めた
アンドレイ・コロベイニコフ
(いずれも12月1日)



(左) Bプロの指揮を執ったウラディーミル・フェドセーエフ
 (右) Bプロのチャイコフスキー《バレエ音楽「くるみ割り人形」》。
 児童合唱はNHK東京児童合唱団(合唱指揮: 間谷勇)が務めた
 (いずれも12月12日)



(右) Cプロの指揮を務めたトーマス・ヘンゲルブロック
 (下) Cプロのバッハ《マニフィカト》。合唱はバルタザール・ノイマン合唱団(合唱指揮:
 デトレフ・ブラチュケ)。《マニフィカト》の後は、バッハ《クリスマス・オラトリオ》より第
 59曲〈コラール「われらはこ馬槽のかたえ 汝がみ側に立つ」〉が演奏された
 (いずれも12月7日)



合唱は東京オペラシンガーズ、合唱指揮は田中祐子が務めた(12月22日、NHKホール)



公演報告

ベートーヴェン「第9」演奏会

2018年12月22、23、24、26日
NHKホール

かんぽ生命 presents N響第九 Special Concert

2018年12月27日
サントリーホール

Beethoven 9th Symphony Concert

JAPAN POST INSURANCE presents NHKSO Beethoven 9th Special Concert

年末の風物詩ともいえる《第9》公演、
今回はワーグナー《指環》での共演も記憶に新しい
マレク・ヤノフスキが指揮を務めました。
堂々たる独唱者・合唱団と共に
新しい発見に満ちたベートーヴェンを奏でました。

ベートーヴェン／交響曲 第9番 二短調 作品125「合唱つき」

指揮：マレク・ヤノフスキ

ソプラノ：藤谷佳奈枝 メゾ・ソプラノ：加納悦子

テノール：ロバート・ディーン・スミス バス・バリトン：アルベルト・ドーマン

合唱：東京オペラシンガーズ オルガン：勝山雅世(27日のみ)



指揮を務めたマレク・ヤノフスキ(12月27日)



左から、アルベルト・ドーメン
(バス・バリトン)、ロバート・
ディーン・スミス (テノール)、
加納悦子 (メゾ・ソプラノ)、
藤谷佳奈枝 (ソプラノ)
(12月22日)



サントリーホールでの公演では
《第9》の前に勝山雅世(左)がブクステフーデ《前奏曲 二長調》、
バッハ《バスターレ ヘ長調》第1楽章、
ギルマン《オルガン・ソナタ第1番》第3楽章をオルガン・ソロで披露
(12月27日)



27日にはサントリーホールでも《第9》が演奏された